國語學の國語教育
學的再建

藤原與一

國語は我々の生命の中に動いてゐる現實である。之を研究そのものと教育の問題とに切り離して考へることは、國語の生きて働いてゐる眞に即するものではなからう。この故に國語學と國語教育の論・實際とは隔絶されてゐてはならないと思ふ。

此處に國語學に就いて考へるのに、今のこの側を層一層と深め廣めてゆくならば、當然この中から國語教育への自然な道が開けて來る樣に思ふ。國語教育が何よりも先づ國語教育である以上、このことは寧ろ明瞭であらう。然らば如何にして現在の國語學を一層深化擴充させるか。私はこれに要する第一歩の

仕事は、言語に對して生活語としての觀方を徹底させることにあると思ふ。言葉を對象的な存在として眺める間は、我々の精神に通つて來るものは捉へ得ず、隨つて常に分析された抽象物を見透してゐることにならう。これでは我々の言語生活を益する國語學的研究は容易に得られない。益しないものは我々の內に生きてゐる言語の研究としては、甚だしく迂遠である。かくて言語の生活語觀が起つて來ることになるのであるが、右述の如くであるならば、これは一種の觀點ではなくて、言語觀のすべてであると言つてよい。

言語を生活語として精しく觀ると言ふことは更に言へば、國語の諸方言にまで立入つて文字通りの國語の實質を究めると言ふことでもある。方言的な相違は、言はば國語の生活語として活用されてゐる現實面であるからである。ここまで來れば、語られてゐることとことばの教育と言ふこととが一如であるのを觀るであらう。これを我々が見詰めるならば國語學の爲の國語學とは何を意味するかに疑問を抱くに至らざるを得まい。國語の學問は生活語の學問として、自らその內に國語教育の問題と方法とを含んでゐるのである。かくて國語學の內面性は一層擴充せられるであらう。即ち、一方では學問の爲の學問としての國語學を、他方に於いては其の應用としての國語教育を、はなれ〴〵に考へると言ふ樣なことの不自然は認められ、これらを統一止揚した國語學の體系が考へられるに至るのである。

國語教育學と言ふ樣な名辭も、實はかう言ふ所から生れてよいのではないか。國語教育の事實を對象として研究したり、或は國語教育の爲の一般的な基礎科學を多く考へたりしてみても、それで直ちに國語教育學が成立し得るものではなからう。又方法論そのものを學問的に講述しても、それで科學性が大いに增されるものとも思はれない。我々は國語教育學なる名稱を敢て問ふものではないが、然し前述の樣な新國語學體系化の企圖は、其處に國語教育學と呼んでよいものを藏してゐるかと思ふ。それにしてもその廣い國語學の領野から、特にどれだけの部分を拉し來つてそれに國語教育學の名稱を冠するやうにしてよいのか、それは未だ豫想がつかない。否寧ろ容易にさうは出來ないのであつて、國語學卽國語教育學であり、國語教育學こそ從來の所謂國語學の歸趨すべき所ではないかと思ふ。尠くとも我々としては一先づかゝる觀方を持つて進むことが、結局に於いて國語學を生かす所以であらうと思ふのである。